

指導資料

学習指導 第2号

鹿児島県総合教育センター
令和5年4月発行

対象 小学校 中学校
校種 義務教育学校 特別支援学校



非認知能力を育てる学習指導の一考察

- ◆ 「非認知能力」や「学びに向かう力、人間性等」の見えない学力について分析し、それらの力を、児童生徒自身が自ら学び取っていく学習指導の在り方が重要である。
 - ◆ 「メタ認知」、「自己調整能力」を育成する学習指導として、「省察する場の設定」や「教師の言葉掛け」、「振り返りの工夫」することが大切である。
- #非認知能力の育成 #省察を取り入れた学習 #教師の言葉掛け

1 はじめに

学習指導要領では、児童生徒が「何ができるようになるか」をキーワードに資質・能力を育成することに重きを置いている。具体的には、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱である。この資質・能力を学力で捉えると、「見える学力」と「見えにくい学力」、「見えない学力」の三つに分けることができる。また、「認知能力」と「非認知能力」の二つに分けて考えることもできる(図1)。本稿では、この中の「非認知能力」と「学びに向かう力、人間性等」に着目し、日

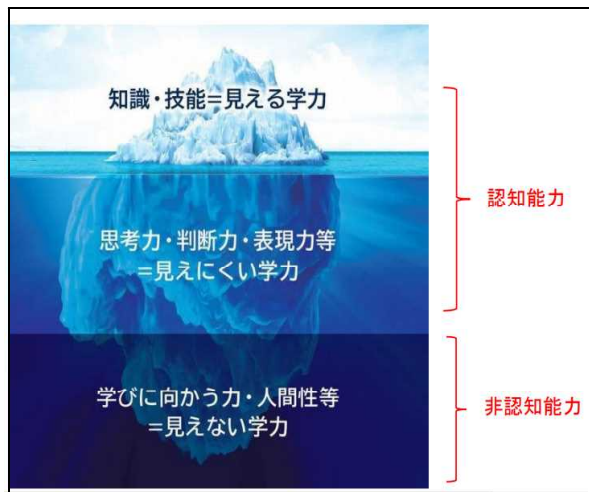


図1 冰山モデルから見る学力の三要素

頃の授業の中で、児童生徒へどのように指導したらよいか考えていきたい。

2 認知能力と非認知能力について

認知能力と非認知能力は、明確に区別するのは難しいが、認知能力とは、各教科等の試験の点数やIQ、偏差値など、学力テストで測ることができる力、非認知能力とは、自信や意欲、忍耐力、創造性など学力テストで測ることができない児童生徒の性格や特性などの内面性と言われる(表1)。この力は、学習指導要領で示す資質・能力の「学びに向かう力、人間性等」であり、他の資質・能力とどのようにバランスよく育成していくのか考えていく必要がある。

表1 非認知能力の種類

- ① 自己肯定感・自信
- ② 粘り強さ・忍耐力
- ③ 意欲や好奇心
- ④ 自制心や誠実性
- ⑤ メタ認知ストラテジー
- ⑥ 社会適応力, 社会性, 創造性
- ⑦ 回復力と対処能力
- ⑧ コミュニケーション力
- ⑨ その他(性格的な特性)

3 「学びに向かう力、人間性等」について

小学校学習指導要領解説(平成29年告示)総則編¹⁾では「学びに向かう力、人間性等」について次のとおり述べている。

(前略)児童の情意や態度等に関わるものであることから、(中略)主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。これらは、自分の志向や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含むものである。(後略)

この情意や態度等を育成するためには、「主体的に学習に取り組む態度」や「メタ認知」に注目する必要がある。

ここでは「主体的に学習に取り組む態度」の評価の側面となる「粘り強い取組」や「自己調整能力」, 「メタ認知」の三つの着眼点から学習指導について述べていきたい。

メタ認知とは、「自らの認知活動(考える, 調べる等)を高次なレベルから認知する, つまり自分の学びを俯瞰的に見つめること」である。学習中にメタ認知を働かせることで、自分の学びを調整することにもつながる。しかし、学びを調整する際、児童生徒がどのように学習を進めていくか判断するためには、学習方略(学び方)を身に付け、粘り強く自らの学習を自己調整できるようになることが大事である。学習方略(学び方)については、学習経験を重ねることで、身に付いていくと考える。児童生徒が、これらを粘り強く自ら学び取っていくためには、自分の学びを自分で省察するための学習活動や教師の言葉掛けが大切であると考えられる。

4 自分の学びを省察する学習活動

児童生徒が学びを自分事として捉え、粘り強く自己調整するためには、自分の学びを常に省察するような学習活動を展開する必要がある。岡田(2020)は、授業中のメタ認知的運動尺度として15項目を示している(表2)。この項目全てに共通することは、児童生徒が

学習過程において、自分の学びを俯瞰すると共に、どのように学びを展開したらよいか考えているところである。つまり、学習内容だけでなく、児童生徒が自分の学びを省察するような場を設定するとよいと考える。

表2 授業中のメタ認知的活動尺度の項目(岡田, 2020)を基に筆者が一部改作

| |
|--------------------------------------|
| 【授業のはじめに】 |
| ① 「今の自分はどこまでできているかな」と考えている。 |
| ② めあてを書く前に、今日することを自分で考えている。 |
| ③ わかっていることと、まだわかっていないことは何かを考えている。 |
| ④ 「これはできる(わかる)ようになりたい」という目標をもっている。 |
| ⑤ 「答えはどうなるのかな」や「どうやったらできそうかな」と考えている。 |
| 【授業の途中で】 |
| ⑥ ノートや黒板を見ながら「ここまでわかっているかな」と確かめている。 |
| ⑦ 「どんな方法で考えたらいいかな」と考えている。 |
| ⑧ わからなくなったら、「どこでわからなくなったかな」と振り返っている。 |
| ⑨ わからなくなったら、違う考え方や解き方を試している。 |
| ⑩ 自分の考えと比べながら友達のことを聞いている。 |
| 【授業の終わりに】 |
| ⑪ めあてで書いたことができた(わかった)かどうかを振り返っている。 |
| ⑫ 「自分の考えがどんなふうに変ったかな」と考えている。 |
| ⑬ 新しくわかったことが何かを確かめている。 |
| ⑭ 「友達のことを聞いてわかったことがあるかな」と考えている。 |
| ⑮ 次の時間にしてみたいことを考えている。 |

この15項目は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価項目としても読み取ることができ、言い換えると、学習活動設定の考え方としても捉えることができる。

導入では、めあてに対して自分のレディネスを省察したり、学習の見通しを考えたりするような学習活動の設定を行う。展開では、自分の学びの状況を省察し、必要に応じて様々な学習方略(学び方)を自ら見いだすことができるような学習活動を取り入れる。終末では、自分の学びを省察し、獲得した学習内容や学習方略(学び方)を確かめ、次の学習に生かしていくような学習活動の設定を行う。そして、これらは教師が、意図的に仕掛けることが大切である。メタ認知を取り入れた学習活動を積み重ねることにより、児童生徒はそのよさを実感し、学習方略(学び方)として自らメタ認知を働かせるようになると思われる。

5 伴走者としての教師の言葉掛け

児童生徒が学習を進める中で、「自己調整能力」や「メタ認知」を高めるためには、教師は主導者ではなく、あくまでも伴走者とし

て児童生徒の学びに寄り添い、その過程を見守り励ましていく必要がある。その際の教師の言葉掛けについて、鹿児島市立山下小学校では、「伴走者としての教師の言葉掛け」として、「尋ねる」、「共に考える」、「認め、励ます」の三つの考え方が大切だと述べてい

る(表3)。また、児童の学びや言動を価値付けたり、意味付けたりすることで自己肯定感や意欲も育つ。このような教師の言葉掛けを通して、児童生徒は、自分の学びを俯瞰したり、学び方を振り返ったり、学習方略(学び方)を学んだりして、自己調整能力を高めていくと考える。

表3 伴走者としての言葉掛け(例) ※ 令和4年度山下小公開全体研究論文より筆者加筆

| 尋ねる(引き出す) | 共に考える(促す) | 認め、励ます(称賛) |
|--|---|--|
| 課題解決に必要としていることや現在の学習状況への認識を引き出す言葉掛け | 子供の考えている課題解決の方向へ進むことを促す言葉掛け | 子供の課題解決への取組を認め、意欲を高めたり、助言したりする言葉掛け |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 何に困っていますか。 ・ 解決できそうですか。 ・ 課題を見つけたね。課題解決のために何が必要ですか。 ・ 結果は、納得できましたか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ まず何ができるといいかな。どうしたら解決できるかな。 ・ そうですね。〇〇コーナー(場)で確かめると、何かヒントがもらえそうですよ。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ もう解決できそうですね。その調子ですね。頑張ってるね。 ・ 解決できたのは、どんな取り組み方がよかったのかな。よく頑張りましたね。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 動機付け ・ 自信, 意欲 ・ 省察 ・ 自己調整能力 ※子供の思考を引き出す。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 粘り強さ ・ 対処能力 ・ 自己調整能力 ・ コミュニケーション力 ※子供が自ら学び取る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己肯定感 ・ 自信, 意欲 ・ 達成感 ・ 自己調整能力 ※次の学びにつながる。 |

(例)【第6学年 体育科 単元名:自分のめあてに向かって!(跳び箱運動)】

| 学びの様相 | 【学びを調整する子供の声】 | 【伴走者としての言葉掛け】 | 教師の身構え |
|---|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 跳び方に関心をもつ。 ・ 上手に跳びたいが、どうしたらよいか分からない。 ・ 自分の経験や知識を基に、どうしたらよいか省察する。(学びの省察) ・ 経験等を基に自分の学習方略(学び方)を考え、自分で決める。 ・ 教師の価値付けや意味付けにより自分の学びに見通しや自信をもつ。 | <p>なかなか上手いかないな。</p> <p>首はね跳びのはねるタイミングがよく分からなくて困っています。</p> <p>はねるタイミングは難しいですね。どうすればタイミングが分かりそうですか。</p> <p>友達に確認してもらったり、タブレットPCで録画したりするとよさそうだと思います。</p> <p>なるほど！友達に頼んでタブレットPCで録画してもらおうと自分で確認できるね。</p> <p>その方法で試してみます。</p> | <p>何に困っていますか。【尋ねる】</p> <p>【共に考える】</p> <p>【共に考える】</p> <p>【共に考える】</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 子供の課題や思い・願いを引き出す。 ◎ 子供の課題や困っている事を把握し発言に共感する。そしてどのように解決させるか考える。 【コツをすぐに教えない】 ○ 学習方法に気付いたことを称賛し価値付ける。また、その学習方略のよさを意味付ける。 ○ 学びの姿を見守る。 |
| <p>タブレットPCで動きを録画し、はねるタイミングを確認して練習を再開する。</p> | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が決めた学習方法で課題解決を図る。 ・ 課題解決のために自分で練習方法を工夫して粘り強く練習に取り組む。 ・ 課題解決の達成感や成就感を持ち、自信をもって次の学びに向かう。 | <p>動画を見ると、「くの字姿勢」は、大丈夫だな。でも、腰が低いような気がする。</p> <p>動画を使って、自分の課題を見付けられたね。そのためにどうしたらいいかな？</p> <p>マットで首倒立からおはね起きを練習しよう。腰を高く上げるとタイミングが上手いきそう。頑張るぞ！</p> <p>さっきよりはねるタイミングがいいね。もう少しで首はね跳びができそうですよ。</p> | <p>【尋ねる】</p> <p>【認め、励ます】</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 子供の取り組み方のよさを価値付け、課題解決の方向性を促す。 ○ 子供が自分で、解決の方法を見だし、課題解決に向けて取り組んでいることを価値付けたり、意味付けたりする。 |

図2 伴走者としての言葉掛けを意識した支援と子供の姿 ※令和4年度山下小公開全体研究論文より筆者加筆

6 自分の学びを省察する振り返り

単元や1単位時間の授業において、最も省察が重要なのが終末の振り返りの場面である。児童生徒自身が課題解決を図り、解決できた成就感や達成感を味わい、学びを省察する中で、自身の学びを俯瞰することができる。ここで重要なのが、児童生徒に「何を」振り返らせるかである。振り返りの視点をワークシート等で絞って考えさせることで児童生徒が省察する方略を学ぶ。メタ認知や自己調整能力の育成から考えると、「学び方」に着目させて振り返らせたい。國學院大学の田村氏²⁾は、振り返りでは、「学習内容を自らつなげ自己変容を自覚する」ことが重要であると述べている。自己の学びを振り返る中で、メタ認知を働かせ、自分の学びを客観的に捉えることができるような振り返りの視点にしたい。具体的には、「課題(めあて)に対して、どのように自分は取り組んだか」等の学び方の視点から振り返らせることが大切である。

また、鹿児島市立向陽小学校の西原氏(2023)は、学び方を省察する工夫としてロイロノートを活用し、「小単元一枚ポートフォリオ」の有効性を示した(図3)。児童が小単元の振り返りを1枚ポートフォリオとしてまとめることで、小単元全体を見通して、自己変容に気づきやすく、これまでの自分の学び方を見直し、次の学びの見通しをもつことができた。また、習得した知識を、概念化することにも繋がった。このように、単元や1単位時間の授業終末では、自分の学びを振り返る場を設定することで、児童生徒は自己変容を自覚し、よりよい学習方略(学び方)を身に付けることができるようになる。



図3 児童が作成した1枚ポートフォリオ

7 おわりに

本稿では、見えない学力と呼ばれる「非認知能力」や「学びに向かう力、人間性等」を育てる学習指導の方法として、「学びを省察する学習指導の在り方」と、「教師の言葉掛け」について述べてきた。この二つの指導方法を考える中で、共通することがある。それは、教師が児童生徒の姿をしっかりと見取り、その後の指導に生かすことである。まずは、児童生徒が「何ができるようになったか」を様々な評価方法で見取る教師の力が重要である。そして、教師は、その子の学びに応じた「個に応じた指導」を行っていききたい。

また、児童生徒自身が、自分に合った学習方略(学び方)を身に付けることも大切である。そのためには、自ら主体的に「学び方を学ぶ」という学習の場の設定と伴走者としての言葉掛けを常に心掛けたい。そのことで、自立的な学び手に育っていくと考える。

さらに、知識や情報が溢れる現代の情報社会においては、自分の課題に対してそれらをどのように取舍選択して学び、実際にどのように活用するのかというメタ認知や自己調整能力がますます重要になる。そのような学びをコーディネートしたり、コーチングしたりすることが、これからの時代の教師の役割だと考える。

ー引用・参考文献ー

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』平成29年7月、日本文教出版
 - 2) 田村学『学習評価』2021年 東洋館出版社
- 岡田涼『児童の授業中のメタ認知的活動と授業に対する内発的動機付け』2020年 香川大学教育実践総合研究41巻
 - 三宮真智子『メタ認知：学習力を支える高次認知機能』2008年 北大路書房
 - 那須正裕『資質・能力と学びのメカニズム』2017 東洋館出版社
 - 桜井茂男『自ら学ぶ子ども』2019年 株式会社図書文化社
 - 西原真琴 令和4年度鹿児島県総合教育センター長期研究者研究発表会資料 2023年
 - 氷山モデルで見たときの学力の捉え(図1)については、梶田一氏の学力モデル(1994年)を基に作成
 - 非認知能力の種類(図2)については、Gutman, L. M., & Schoon, I. (2013). The impact of non-cognitive skills on outcomes for young people. Education Endowment Foundation. 西田ら「非認知能力に関する研究の動向と課題」東京大学大学院教育研究科紀要 vol58 2018年 p33を基に筆者作成

(教科教育研修課 才川文秋)

※ 本資料はUDフォントを使用しています。